

テイルズオブメンティーフ～君の嘘を暴くRPG～

紫桜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

そして世界は救われるだろう

紅を纏いし少女を生け贄として

そして平和は訪れるだろう

青を纏いし少年が導きし大地に

世界は救われるだろう平和は訪れるだろう

血に染まったその手と引き換えに

ティレニアに昔からあるお伽話。

世界中誰もが知るそのお伽話は、しかし空想のものでしかない。

そう、『空想』なのだ。

…ただ、一人の少年を除いては、そのお伽話は空想の話だった。

一人の少年がついた嘘が真実となる時、本当の命の意味を知る

ティルズオブメンティーフ

君の嘘を暴くRPG

※こちらはティルズシリーズを基本としたオリジナルティルズです。本家様で使われている術技の名前を使っておりますが、本家様とは全く関係ない、所謂「二次創作」です。

目次

各種設定

トア	1
ジリイーナ	6
出会い	
プロローグ	11
日常と美味しいご飯	18
日常とそれが壊れる音と	22
晶破現象	27
旅立ちと	30
造花の花	
二度目の厄災と衝撃的な出会いと	32
箱入り娘(?)と昔語り	36
お宅訪問と洒落こもう	41
紅茶色の密会?	45
真実を暴いていきましようか?	48
さてさて答え合わせの前に息抜きを	52
悲しみなんてほんの一瞬だしすぐ忘れられるし	55
黒騎士	
足元にはご注意ください	62
小さな疑惑はしかし泡のように消えて	66
それは、そう。後悔。	69

各種設定

トア

主人公

名前

ソラルトリア・ディアント・エンハンブレ

愛称

トア

性別

男

一人称

俺

二人称

あなた、貴様

年齢 16歳

「俺を『殺してくれる人』を探している…よくいる旅人だ。」

「こんな髪も!!瞳も!!俺は欲しくなんてなかった!!欲しくなんて、なかったんだ!!」

「どうして…俺達は…こんなふうにならなかつたんだらうな…」

性格

皮肉屋で口が悪く面倒くさがり屋だが、面倒見がよく小さな子供には優しい。その上困った人はどう頑張っても放っておけないというどこかお節介な面も持つ。ちなみに、そんな損とも言える性格が、彼の嫌いな面倒事を引き寄せることも多々ある。

しかしそのような穏やかな本質とは裏腹に、生きるという事に執着を持たないというどこか虚無を感じさせる部分もあわせ持つ。旅をしている理由も「自分のことを殺してくれる人を探すため」というものであり、人を助けようという心の根底にもその思いは結びついてい

る。そのためなのか、誰かを助けようとするときは、自己犠牲の塊になることも。そんな彼だが、何故か、自殺願望はない。彼曰く「自殺はしてはいけない」のだそう。

追記

『晶破現象』のことについてかなり詳しい情報を持っているので、仲間達に度々不審がられる。その知識は彼の故郷で培われたものだが、詳しい話は決して語ることは無い。

容姿

紅色の膝まである長い髪と深いピンク色の瞳（マゼンタ色）を持つ。彼自身、この髪と瞳の色のことを嫌っており、事あるごとに「全て黒く染まってしまうばい」と呟いている。また、病的な程に肌が白い上に女顔でもある。そのせいなのか女だと間違われることもしばしば。その時はブリザードオーラを吹かせながら怒る。

武器

2丁のガンブレード

片手剣と同じくらい長い二振りのガンブレードを用いて戦う。

また、銃のトリガーの部分は剣の持ち手と同化しており、早打ちもできる。（普通の二丁拳銃よりは遅め）

戦い方

2丁のガンブレードで切り裂いたり撃ち抜いたりして戦う。相手に対して冷酷で無慈悲。どこか狂気的な技を使う。基本的に水属性を使う。攻撃魔法も使える。また、戦い方が自分を顧みないものなので生傷か絶えない。

使える技

水鏡（ミズカガミ）

右と左のそれぞれの剣で斬り刻む技。

蒼破刃（そうはじん）

右の剣から前方に衝撃波を打ち出す技。

連歌（れんか）

バックステップしながら前方に連続で撃つ。敵から距離を取るためによく使う。

雨水（あまみず）

特殊な弾丸で敵の足元に丸い水溜りのようなものを作り、弾丸を打ちながら振り上げた右の剣を振り下ろす。敵はそのまま顔からその水溜りにつつこんだりする。↑↑

水風（すいな）

体を横向きにして右の剣を敵に突き刺し、左で爆発系の玉を撃ちこみながら右の剣を抜き、後方に吹き飛ばす技。

水灰（すいそく）

一瞬にして前方にステップし、そのまま敵の懐で剣をクロスするようになりつけ交差したまま敵の頭や腹を狙って撃つ。敵をダウンさせる時がある。

水灰・狂（すいそく・くるい）

『敵をダウンさせた時のみ発動可能』地面に突き刺した右の剣で切り裂きながら空中にあげ、左の銃で撃ちぬく。

水星（すいせい）

両方の剣で敵を空中に舞い上がらせ両方の銃で全弾撃ち込む。

水星・恐（すいせい・きょう）

敵が空中にいる時に便利な技。自身が飛び上がり地面に叩きつけるために剣で斬りつけ、地面に叩きつけた敵を空中から撃つ。

蒼流連華弾（そうりゅうれんがだん）

敵を切りながら空中にジャンプしそのまま剣を振り下ろしながら真つ二つに切るように斬りつける。敵が硬い時のみ剣を振り下ろすのではなく敵の瞳など柔らかいところを狙いそこに力を集結させ左手で一弾だけ撃ちこむ。

魔術（表記のみ使用可能）

アクアプロテクト

発動者を守るうように気泡のようなものを数個出現させる。敵がある程度近づいてくると割れて牽制する。

詠唱

「我が身を守護せよ」

「守れよ」

アクアニードル

詠唱後、ターゲットの敵の頭上に魔法陣を生み出しそこから水柱を数本落とす魔術。

詠唱

「氷結せし雫よ、降り注げ」

「天気予報はあてにならないな」

レフアーク

ターゲットにした敵から水分を抜き取り攻撃する魔術。敵に疲労を与える。なお、この魔術はジルにより使うことを固く禁じられるがよく使う。

詠唱

「生命の根源たる水、今この時流れ落ちる」

「ほーら、死んじまうぞ」

スプラッシュ

地面から水の柱を出現させる。しかし、使い方次第で敵の頭上、側面から水柱を出現させることや水量まで調節できる。

詠唱

「敵を貫く水の槍。ここに来たる！」

「うざいのは飛ばすのが一番だな」

タイダルウェイブ

戦闘フィールドの中央に大きな渦潮を出現させ、飲み込む。味方選別は必須。

詠唱

「優しき水よ、狂いて全てを飲み込め」

「面倒…消えてくれない？」

レイジングミスト

高熱の霧を敵の中央に発生させ広範囲攻撃する魔術。

詠唱

「全てを包む怒れる霧よ、今その姿を表し仇なす者達に降り注げ」
「俺暑いのが嫌いなんだけどなあ」

フルート

「戦闘フィールド全体に大きな魔法陣を作り、その中に敵を閉じ込めその中に流れこむ水に沈める魔法。」

詠唱

「清廉たる水の流れよ、荒れ狂う流れになりて我に仇なす者達を虚ろに沈めよ」

「悪いけど、少し本気で行くぜ…虚ろに沈みて消え失せろ！」

秘奥義

水連・骸（すいれん・むくろ）

敵との距離を一気に詰め連撃を与えた後、地面に左の剣を突き刺す。そこを中心とした大きな魔法陣をつくり、そこから現れた水に絡め取られた敵に向かって後ろに跳躍しながら下がりそのまま右で敵を撃ちぬく。（着地したあと突き刺していた剣は戻ってくる。）

秘奥義中の台詞

「そろそろご退場願おうか？俺の目の前から、消えろっ!!」 水連・骸っ
!!”…いつになったら俺は死ぬる?!”

ジリイーナ

ヒロイン

名前

ジリイーナ・スエロ

愛称

ジル

性別

女

年

17歳

一人称

私

二人称

貴方 君

「生きることって、とつても素晴らしいことなのよ」

「それでも、私はその選択をするわ…もしそれが、私の信念をねじ曲げてしまっても」

「私は、まだ…貴方と一緒にいたいっ！だから…お願い…っ!!」

性格

天真爛漫で、優しい心の持ち主だが、面倒事にはあまり関わりたくないという一般的な考えも持ち合わせている。なので、一人突っ走って行こうとするトアにブレーキをかけるストツパーの役割をしているが、あまり効果はない。結局、故郷で培った話術を最大限に利用して、情報収集などをやらされる。ある意味不憚な少女。その上箱入り娘感があるので、たまに突拍子もないことを言い出しては仲間達に呆れられるか驚かされている。また、人の生き死に異常な程に敏感。だからなのかトアの死にたがり思考を理解することが出来ず、改善させようとしている。もちろん、自分も死にたくない。

追記

幼い頃の記憶がなく、本当の故郷がどこか知らない。だが、彼女自身は働いていた宿屋『ローゼス』を自身の故郷だと思っているのであまり気にしていないらしい。

他人の生き死にに敏感なのは失った幼い頃の記憶に鍵があるのかもしれない。

容姿

肩までの青い短い髪と、髪よりも深い青い瞳を持っている。背はそこそこ高く、トアよりもほんの少しだけ大きい。彼女いわく、「トアは細いし小さい」らしい。動きやすい服を好むけれど、スカートを履いている。が、きちんとスパッツは着る。

棍棒

自身の背丈ほどある。普通の棍棒よりも細く、軽いので扱いやすい。また、伸縮自在で一番長い時は自身の背丈ほど。小さいときは手のひらに乗るくらいの長さになる。普段は右足の太ももに付けたガーターベルトのようなものにつけて持ち歩いている。

戦い方

宿屋の看板娘をしていた割には戦い慣れしている。基本は棍棒で突き刺し、振り下ろし、切るように薙いだりする。大振りなふりをするが、小回りもきく。トアよりも歴代主人公の戦い方に似ている。しかし、回復役でもおる。バーサクヒーラー???

技

紅破（こうは）〈炎〉

棍棒を地面に叩きつけ衝撃波を発する。魔神剣的な奴。

烈風（れつぷう）〈炎〉

両手で棍棒を回転させ敵を引き寄せながら巻き込むようにあて攻

撃。

蓮花（れんか）〈無〉

3連続の突き攻撃。からの棍棒を前方で回すことで敵を引き寄せ巻き込みながら攻撃する技。

天鏡（てんきよう）〈風〉

敵の懐に一気に入り込み、下から打ち上げるように棍棒を振りその反動使って敵を蹴り更の上へ打ち上げる。

天鏡・翔（てんきよう・しょう）〈風〉

空中にいる敵に対して発動可能。流れるような足での三連撃をした後踵落としの要領で敵を地上に叩きつける。

地鏡（ちきよう）〈地〉

棍棒を地面に突き刺しそこを中心に岩が盛り上がり攻撃する技。

水鏡（すいきよう）〈水〉

トアと行動を共にしている時だけ発動可能。水を纏って大剣のようになつた棍棒を一点集中で振り下ろす技。

紅迅烈波（こうじんれつぱ）〈炎〉

連続の突き攻撃から敵の頭を狙って上から叩き落とすように棍棒を振りおろし、体制を崩した相手に強力な横蹴りを食らわせる技。

魔術

ファイアーボール〈炎〉

3つの火の玉を前方に飛ばす魔術。

詠唱

「炎の三連」

「小さな火の粉たちの悪戯」

レッドフアング〈炎〉

炎の大きな獣の口が敵を噛み砕く魔術。

詠唱

「獲物を狙う残虐な獣よ、ここに現われよ」

「炎の牙、敵を噛み砕くー」

ファイアースピア〈炎〉

天から炎の槍を呼び出しターゲットの敵とそれの周囲の敵を焼き

殺す魔術。

詠唱

「天より振りし裁きの槍よ、我に仇なす者達に鉄槌を！」

「落ちよ!!」

エンシエントノヴァア〈炎〉

古代の正常な炎を呼び出しあたり一面を焼き焦がす。その威力は異常でジルが本気で怒った時にしか出さない魔術。

「古に眠りし正常な炎よ、その姿を今ここに表して敵を滅せよ」

「消えて」

ピクシーサークル

味方の体力を少量回復。

詠唱

「妖精の贈り物」

「無理しないで！」

ライニング

味方の状態異常を全て解除。(つまりリカバー)

詠唱

「かの者を侵す影、消え去れ」

「戦いにくいよね」

フェアリーサークル

範囲内の味方の体力を中回復。

詠唱

「妖精達の、美しき乱舞」

「お願いね」

レイズデッド

戦闘不能の見方を復帰させる。

詠唱

「道に迷いし魂をここに導け」

「戻ってきてー！」

フリーユース

範囲内の味方の体力を大幅に回復。また、状態異常を全て解除。

詠唱

「痛みをともなう影たちよ、転じて全てを守る加護となれ」

「まだ負けられないの、だからっ！」

秘奥義

ゲイボルグ

棍棒の先端に炎が纏わりつき、それが切っ先の鋭くなった槍の形をなす。その後でそれで敵を二回突き刺し最後に敵の心臓部分に槍を突き刺そうと空中に高く飛び上がった後狙いを定めるがジルが苦しげに表情を歪め結局は落下していく勢いを使って槍を叩きつけフィニッシュ。

発動時

「さよならの時間だよ」

棍棒が槍になる時

「私が、やらなくちゃならないの…っ」

苦しげに顔を歪ませ

「…それでも、私はっ!!」

フィニッシュの後

「…これは、間違った答えなの…?」

出会い

プロローグ

〔プロローグ〕

澄んだ鈴の音が耳に直接響く。

瞳を閉じたまま、その音を聞き続ける。

それ以外の音をすべて遮断するかのよう。

小さいけれど、豪華な鳥籠の中で。赤色の長いヴェールで体全体を覆ったその人をはただ静かに。己の故郷の終わりから瞳をそらし続けていた。

遮断した音は、人々の絶叫。

瞳を逸らしたのは、炎に焼かれる人々の醜い姿。

しかし、そんな凄惨な状況のなか、その人を囚えている炎よりもなお赤い色をした鳥籠だけは燃えることがない。

そんな、静かな鳥籠がいつそ場違いに思えるほどにどんなに全てを遮断して遠ざけても燃え盛る炎はその勢いを殺すどころか増していくばかり。

ふと、瞳を閉じてその光景から瞳を逸らしていたその人は、閉じていた瞼をゆつくりと開いた。それとともに澄んだ鈴の音が止まる。

赤い絨毯の上に直に座っていたその人は虚ろな瞳のまま立ち上がり、鳥籠の中から絨毯よりも濃い赤色の柵にそっと触れた。

すると、その柵は先ほどの様子が嘘であったように一瞬にして炎に包まれた。柵だけではない。鳥籠の中の絨毯までもが少しずつ炎に飲まれていく。

それをその人は、やはりどこか虚ろな瞳でただ見つめる。

そして、その炎がその人のことを覆っているヴェールに燃え移ろうとした。

その時だった。

まるで炎が意思を持ったかのようにその人の『避けて』燃え広がったのだ。

それを認め、その人は初めてその瞳に感情を浮かべた。
『諦め』という、どこまでも仄暗い感情を。

「どうやっても、俺は『まだ』死ねないのか…」

少年とも少女とも取れる声で呟いたその人は、ゆっくりと炎が飲み込んだその場所を歩いて行く。

その床に広がる炎でさえも、その人が歩を進めれば、炎がまるで恐れ慄いたように一瞬にして消える。

その人が鳥籠を囲むように作られた、祭壇にも似た部屋の扉の前に立つときにはその部屋から炎は完全に消えていた。

その人は、すつと腕を上げ体を覆っていたヴェールを脱いだ。

そこから現れたのは、炎よりも赤く。血よりも恐ろしい紅色の髪とマゼンタ色の瞳を持った一人の少年。着ている服は白いロングコート。

少年はコートを翻し、扉に手をかける。数秒何か迷うように瞳を閉じたけれどすぐにそれは消え、扉は開け放たれた。

少年が首から下げた青い石のついたペンダントが吹き込んだ熱い風に、揺れた。

「いらっしやいませー!!」

よく響くアルトボイスが部屋中に心地よく届く。受付の横で酒場で酒を飲み明かしている常連の男達はその声を聞きたびに、楽しげに笑い合う。

「今日もいい声だなあ! ジルよお!!」

「ああ! ホント元気が出らあ!!」

「褒めてもなーんにも出ないよ!! でもありがとー!!!」

そんな男達からかけられた彼らなりの労いの言葉に『ジリーーナ・スエロ』は笑顔で答えた。

ここは、テイレニアの帝国がある大陸『アルージュ』の辺境の地にある小さな村に佇む酒場も兼ねた宿屋『ローゼス』。ジリーーナことジルは、その宿屋の看板娘だ。

「ジルはほんつとにいい声持つてるよなあ」

「ああ！この声を毎日聞ける俺達はほんと幸せ者だあ〜」

「もお、しょうが無いなあ…そこまで言われたらサービスしちゃう!!」
「よ！待ってましたっ!!」

そんな和やかで活気のある会話にかき消されるくらいに静かにドアが開かれた。それにいち早く気づいたジルはアルトボイスを響かせる。

「いらっしやいませっ!!」

しかし、来訪者はその声に応えることはせずゆっくりと建物内を見回す。来訪者は長いマントを着ている上に、フードを深くかぶっているため顔が見えなかった。

その様子を見た一人の常連のは

「おーあんた！ここは初めてかい？」

と明るくその来訪者に声をかけた。

「…コクリ」

「そうかそうか!!…随分とボロボロな服装なようだが…旅人かい？」

「…コクリ」

「長旅だったんだらう?…このご時世、よくやったものだよ」

「…コクリ」

「あー…つと…」

「…まだ、言いたいことがあるのか？」

しかし、来訪者はそれにただ頷いて返すだけで会話を成り立たせようとしなない。常連の男は困り果てたように苦笑いしていたが、暫くすると飲み仲間の一人に名前を呼ばれ、その場を去った。

その一連の動作を観察していたジルは、恐る恐る来訪者に尋ねた。

「えつと…ごめんなさい。気を悪くした？」

「なぜ？」

「あ、違うならいいの!!気にしないで」

いつそ冷たく映る反応に、気を悪くさせてしまったかと心配になったが幸いそう言うわけではなかったらしい。多分そういった性格なのだろう。

一安心したジルは、背筋をピシッと伸ばしスウツと息を吸い込んでから明るい笑顔を作り言った。

「では改めまして…ようこそ!!宿屋ローゼスへ!今日はどういった御用でしょうか?」

「…取り敢えず一泊させて」

「お泊りですね?かしこまりました!!一泊200ガルドになりますか…」

「構わない。」

「ありがとうございます!それではお部屋までご案内いたします」

元気な声にもやはりどこか淡泊に返す来訪者に嫌な顔ひとつもせずジルは応対をする。スムーズに接客は進みそのままジルが来訪者を部屋まで案内するために宿屋の中央付近にある階段を登ろうとしたその時だ。

バンツという音と共に宿屋の扉が乱雑に開けられる。それにはじかれたようにジルは顔を上げた。それはカウンターで酒を飲んでいる客達も同じだった。

「はあああ??なんだよ…しけた酒場だなあここはあ」

間延びした声とともに現れたのは、三人組の男達だ。男達は他の客を押し退けるようにして店内に入り、並んでいる椅子を奪ってそこに座った。

「おおい??酒は来ねえのか!?客待たせんじゃねえよ!!!」

その中でも一段と体が大きい男が耳を塞ぎたくなるようなねつとりとした声で叫ぶ。

「おいあんたら、そこは俺達が先に座ってたんだ!!そこをどけよ!!」

その態度と声に耐え切れなくなったのか、一人の若者がその男に言う。すると男はテーブルの上に置いてあった空になった酒瓶でその若者の頭を勢い良く殴った。若者はそのまま床に倒れた。そこに広がる赤色。

「ああ???よおく聞こえなかったからあく殺しちゃいましたあく」

「なあにが『先に座ってました!』だ!」

「ほんと笑えるよなあ?こんな無様に死んじまってよお」

三人組は倒れて血を流している若者のことを嘲る。

ジルは、我慢の限界だった。傲慢な態度も嫌いだだったが『命』を軽んじるような発言は彼女にとって許しがたいことなのだ。

声を張り上げるために大きく息を吸い込んだ、

『殺し』て…くれるのか?」

その、刹那の瞬間。彼女よりも透きとおった声がその場に響いた。

その場の雑音に交じることなく響いた声は少年とも少女とも取れる声。ジルはそんな声を初めて聞いた。

その声の主は、一步…その男達に近寄り再び問いかける。

「あんたらは、頼めば人を殺してくれるのか?」

いつそ純粹にも聞こえる言葉は、どこまでも狂氣的だ。それを聞いた男達も数秒目を見張っていたがすぐに声を上げ笑い始める。

「おいおいおい!!こいつ、殺してくれるかだつてよお?」

「頭イカれてんじゃねえの?」

「ああ、間違いねえ」

来訪者の問に答えることもせず、ただ笑い転げるその男達に来訪者は言った。

「質問に答える、豚共…ああ、そうか。お前たちは豚だから人語が理解できないのか…すまない、悪いことをしたな」

「…え?」

来訪者は先程までの静けさが嘘に思えるほどに饒舌に、そして辛辣に暴言を吐いた。それを聞いた男達は顔を怒りに染め上げ

「良い度胸じゃあねえかあ、あ?…そこまで言うならお望み通り、殺してやるよっ!!」

その中の一人が背中に背負っていた大きな大剣を来訪者に振り下ろした。息を呑み顔を逸らしたジルだったが、いつまでたっても悲鳴の声は聞こえない。勇気を奮い立たせ顔を上げ見た光景に彼女は目を疑った。

そこにいたのは、マントのフードがとれて素顔を晒している来訪者。その頭の真上には先ほどの振り下ろされた大剣が不自然にその動きを止めていた。来訪者はそれを冷めた目で見つめ、小さく何かを

眩いた。

「ど、どうなってんだよこれ!？」

「てめえ!?!何しやがった!!!」

狼狽える男たちに言葉を返すことなく来訪者は右腕を大きく横に払った。

すると、突然男たちの一人、大男が姿を消した。正確には突然空中に現れた水柱に勢い良く横から突き飛ばされたのだ。大男はそのまま壁に激突し、気を失った。

驚き声も出ない男達に構わず来訪者は言い放った。

「お前たちにはもう用はない…きつさとその汚い面を俺の視界から消してくれ」

そういつた来訪者は、マントを男達に叩きつけるように投げ視界を奪った。

ジルは、見た。来訪者が着ている白いロングコートの腰の部分にクロスするよう取り付けられた鞘があることに。

来訪者はその鞘から二振りの剣を取り出した。持ち手が少し歪なその剣を持ちながら、来訪者は二人組になった男達に一気に詰め寄りそのまま交差するように剣を振り下ろし、何が起こったかも理解できていない男達の顔にその剣の切っ先を向け、躊躇いなく『引き金を引いた』。

「うわあああああっ!!!」

叫ぶ男達。しかし、

「馬鹿が。お前たちみたいなのに無駄弾は撃たないって決めてんだ：わかつたら、とつとと失せろ」

いわれた男達は初めに飛ばされた大男の事を必死に引きずって無様に逃げていった。

カチャリと音を立てその剣を鞘に来訪者がしまう。ジルは困惑した顔で、しかし問いかけた。

「貴方…何者?」

来訪者は、ゆつくりと振り向く。炎よりも赤く。血よりも恐ろしい紅色の髪をなびかせながら。そして、真っ直ぐに見つめてくるその瞳

は、マゼンタ色。

「俺はソルトリア。ソルトリア・ディアント…」

そこで言葉を切った来訪者はほんの少し微笑んで続けた。

「俺を『殺してくれる人』を探している…よくいる旅人だ。」

この少年と少女の出会いが

運命というものだ言うことを

悲しき物語の始まりだということも

未だ、『彼女』は知らなかった

日常と美味しいご飯

シャーンシャーンと耳元で音がなる。

澄んだ鈴の音は、重なり歪んで耳障りなものとなった。

それに耐え切れず瞳をそっと開ける。空は太陽を登らせ清々しい朝を迎えつつあった。

「また、か…」

その柔らかい日差しを浴びながら、トアは光のない瞳を辛そうに細める。考え込むようにトアはそのままベッドに寝転んでいたが、ふと彼を呼ぶ声が下から聞こえた。

「トアー!!降りてきて、朝ご飯できたよ!!」

よく響く、周りを安心させるような声。

それに一言も返すことなく、しかしゆっくりとベッドから起き上がり二振りのガンブレードを腰につけたトアは心の中でここ数日でもう何回目かもわからない溜息をついた。

トアの悩みごとは、7日前のことに遡る。

焼け焦げて跡形もなくなった故郷から時間がわからなくなるほど歩き続け、ふと見つけた小さな宿屋。

そこはとても温かい心が溢れている場所。冷たい心なんてなかった。

その中でも一際目を引く者がいた。

青い、髪と。瞳を持つ者。

自分とは真逆の…心の持ち主。

だから、助けた。生に満ち溢れ、輝くその瞳が気に入ったから。

でも、まさかこんなことになるなんて思わなかったんだ。

「貴方…何者?」

「俺を『殺してくれる人』を探している…よくいる旅人だ。」

トアが誰なのかと問うてきたその青い少女に、トアはわかりやくすかつ簡潔に答えた。すると、その少女の瞳が驚きに見開かれたと思っ

た次の瞬間には怒りというものに満ち溢れたものとなっていた。

『殺してくれる人』：ですって？ふざけたこと言わないでよ!!」

「…は？」

「は？、じゃない!!嘘でもそういうことは言ってはダメなのよ!」

「いや…嘘じゃねえんだけど…」

「さらにダメ!!」

それから暫くその青い少女はトアの死にたがり願望に丁寧につつコミを入れ続けた。

そのやり取りは宿屋のお客が止めるまで続いたのだった。

仕度をしながら7日前のことを振り返り、トアは珍しく深い溜息をついた。本来ならすぐにここを立ちたいが青い少女：ジルに強く止められ未だとどまっている。

(まあ、だからといって困ることなどないんだけどな)

そんなことをつらつら考えながらも無意識に体は仕度を済ませ宿屋ローゼスのエントランスまでトアは移動していた。

すると、青い肩につくつかつかないかの髪を揺らしながら楽しげに今日の朝ご飯を用意しているジルの姿があった。

「あー!『おそ』よう、トア。遅いから起こしに行こうとしてたところよ?」

「おはよ…てか、まだおはよの時間だろ…お前の朝は早すぎんだよ。」

「あら?早起きは三文の得って言うでしょ?」

得意げに笑うジルに、トアは小さく溜息をつき食卓につく。今日のメニューは、今朝取ったのだろうと予想される新鮮な野菜のサラダ。こんがりと焼けたクロワッサン。焼き具合が絶妙目玉焼き。

「さあ、たつぷり召し上がれ!」

「…頂きます」

ニコニコと明るい笑顔を浮かべながら食事に手を伸ばしたトアのことをじつと見ているジルは、何かを待っているようだ。

「いつもいつも、なんで俺に言わせようとするわけ?」

「いいじゃない。減るものでもないでしょ？ たった一言言うだけでしょ？」

期待に満ちたその視線に、先に折れたのはトアだ。相変わらず無愛想な顔をしていたがそれでも口を開く。

「今日も、うまい」

「よかった！ じゃあ、これから毎日作ってあげるから死ぬなんて思わないでね」

「それとこれとはまた別問題。俺の考えは変わらない。」

綺麗な声で放たれた賛否の声に嬉しそうに嬉しそうに微笑みながらも、今がチャンスとトアの『死にたがり』を直そうとする。けれど、それはあっさりバツサリ却下される。

「あのな？ おたくは毎度毎度俺がお前の飯をうまいって言うたび、どうしてそうやって俺の旅の目的否定する上に終わりにしようとするの？ 俺の旅終わっちゃうだろ？」

「だっ、て…死ぬなんて悲しいわ」

溜息をつきながら呆れた声音で話すトアに、ジルはどこまでも悲しそうな顔で呟き、そのままうつむいてしまった。それをつまらなそうに見ながらトドメとでも言うようにトアは言った。

「だから、なに？ …死ぬのが悲しいだなんてそれはあんたの価値観。それを俺に押し付けなくてくれるか…迷惑なんだが」

「そうね…でも」

一気に重くなるその場の空気。ふと、ジルが顔を上げトアの目の前にある皿を見る。

「ちやーんと食べ物は残さず食べるのね」

「だってマジでうまいもん。ここの飯」

そこには食べ物だけが綺麗になくなった空っぽの皿だけが残されていた。

「…とっても真面目なお話してるのに、リスみたいにモグモグご飯食べないでくれる…」

「それは無理」

一瞬流れた重苦しい空気を壊すように落ちてきた和やかな会話。

二人のことを影から見守っていた宿屋の女将はやれやれと言った風に首をひとつ振った。

それから、数時間後。

宿屋のピークが過ぎ、朝の喧騒が静かになった頃。トアが自室として使っている部屋のドアがノックされる。トアはそのノックの音と階段を登る足音で扉の前にいるのが誰なのか予測をつけた。

「トアアーっ!!遊びに行きましよう!」

「…うるさい、わかったから騒ぐな」

果たして。ドアを開けて元氣よく入ってきたのは何かをやり遂げたような顔をしたジルだった。

「毎日毎日、よく飽きないものだな…。」

「だってこうやって外に誘わないとトアはすぐに引きこもりになるでしょう?」

瞳を輝かせながら話すジルにトアは、またもや深い溜息をつく。

…死にたがり宣言をしてからというものジルはトアの事を何かと外に連れだす。

「別に構わないだろ…俺が引きこもりになろうがなるまいがお前には関係ないことだ」

「その言い分のほうが関係ないもんね!ほら、行こ!」

「おーい、引っ張るなあ〜」

そして今日もそれは例外ではなく。言葉通りトアはジルによって文字通り『引っ張られて』行つたのだった。

——この時、『私』は考えもしなかった。

当たり前のように、『私』は明日が来るのだと思つてた。

けれど、それはただの幻想なのだと『私』はこの後その身をもって味わうことになる。

自分が、どんなに。無知で、無力で…愚かだったという事を——

日常とそれが壊れる音と

「トアアアア！ほら早く早く！」

「はいはい」

太陽が天高くその姿を表す頃、ジルとトアは二人で村の近くの水場に遊びに来ていた。

「ていうかなんでまた水場？この前もそうだっただろ」

「だって、ここならトアの『あれ』見られるでしょ!!」

「…そーですか」

ジルがいう『あれ』とは、ローゼスに泊まり始めてから三日目の日の時にやったあるトアの特殊な力ことである。

その日は生憎の雨で、酒場の方もいつもの喧騒が嘘のような静けさだった。だからといって、外は雨。出かけて遊びに行くということもできず、ジルは暇を持て余していた。

そんな時だった。

「そんなに暇ならいいもん見してやるよ」

珍しく、機嫌がいいトアに連れられてローゼスのオープンテラスに行く。余談だが、このオープンテラスは店の客にもかなり評判がよく人気だ。

しかし、雨が降っていてはそれも逆転してしまう。ジルは傘をさし仏頂面でトアに抗議した。

「トア…こんなところにいたら濡れて風引いちゃうわ！中に入りましょう？」

「ばーか、この雨がいいんだよ」

しかし、そんなジルの講義を無視した上であろうことかトアは傘もささずにパツと外に飛び出した。その姿にジルは焦り、声を張り上げようとして、逆にその息を飲み込んだ。

「っ!!…トア…？それ…」

「来いよ。あんたは『特別』に招待してやる」

そう言っって手を伸ばすトアは、音を立てながら降る雨に全く濡れて

いない。その姿に戸惑いを隠せずに両手で傘の持ち手をギュツと握ると、トアが初めて穏やかに微笑んだ。

「怖くないから…おいでっ」

雨の中にいるトアはとても綺麗な上に優しい。ジルは誘われるようにその手をとり開いたままの傘をそつと手放した。けれど、雨はジルに降り注ぐことはなく、まるで守るように彼女を覆う。雫の膜で覆われたその光景はとても幻想的に映る。

「すごい…綺麗」

思わず言葉をもらすと、トアはやはり穏やかに微笑み。スツとジルの手を握っている手とは逆の手を横に払った。

すると、まるで雫がトアに従うようにまるで踊るように舞い落ちる。それは時に動物などの形も作りジルの目を奪う。

「あれ、うさぎ？…こっちは馬だ！…わあ…すごい！綺麗っ!!」

「お前、ホントそればっか」

その様子にクスクスと笑ったトアに、ジルは笑って「だって本当なんだもの！」と返す。するとトアは黙って優しく微笑んだ。

「…こんなことになるんだったらあんなことするんじゃない…らしくないことはしないもんだな」

「えー!!また見たい！見せてっ」

「気が向いたらな」

そんな幻想的な時間をジルはいたく気に入ったらしく、この頃遊びに行くのはもっぱら水場の近くか大きな湖になった。例に違わずトアが今歩いている道は、村から離れた湖がある場所だ。

上機嫌のジルに溜息をつきつつ歩く事数十分。予想通り湖についてた。

「さあ、トア！見せてお願い!!」

「たくっ…仕方ねえなあ」

瞳をきらめかせて微笑むジルにトアは結局はいつも折れ、ジルのためだけの水上のステージを披露する。

生暖かい日常。
穏やかな時間。

そして、ジルの輝くような微笑み。
それを見るたびに、いつも蘇る記憶がある。

隣で頬を染めながら楽しげに笑うジルの気配を感じながら、トアは魔術に集中するフリをして瞳を閉じ思考の海に沈む。

瞳を閉じれば広がる、あの赤。

全てを飲み込み等しく灰にしていくそれ。

その中から不意に伸びてくる焼け焦げた無数の腕。しかし、それは一定の距離を保ち、それを見つめる「彼」には決して触れることは無い。

皮膚だったものがずるりとそれから零れ落ちていく。それを「彼」が無感動に見つめている。

そんな「彼」を責めるように耳に直接声が響く。

「オマエガ望ムノハ、コンナコトジャナイ」

「忘れルナ、オマエガ、望ミ。果タスベキコトヲ……………」

それでも「彼」は…トアは。それらが無感動に見つめているだけだった。

そんな思考を打ち消すように、不意に淀んだ鈴の音が耳に響いた。

これは、合図。あの、呪われた雪が降る…

「っ!」

「?、トア?」

水晶が割れるような音を立てながら破裂した雫たち。その様子にジルは驚き、反射的にトアを振り返る。その先には顔を険しくし、空を見上げるトアの姿があった。

そのどこか悲しみを漂わせる瞳に不安につて声をかけようとした瞬間。強く腕を掴まれ、引き寄せられる。抵抗する暇もなかった。そのまま覆うように抱きしめられる。

そして、ただ一言。風に流されそうな声で言われた。

「…ごめんな」

そのどこまでも痛みをこらえるような声音を、どこかで聞いたこと

があるようだ、何故か暗くなっていく視界の隅で感じた。

倒れ込んでくるその肢体をそっと抱き上げる。瞳を閉じて眠っているその顔は、どこまでも穏やかだ。

彼はその寝顔を暫く見つめた後、ふっと空を見上げた。白く、いっそ無垢な色をしたそれは、きつとすぐにこの少女を絶望の底に落とすだろう。

「もし…」

静かに呟かれたその言葉は続くことはなく、彼らを守るように湧き出る水の中に飲まれていった。

遠くで優しい歌声がする。

懐かしいと感じるその声は、しかしどこで聞いたものなのかわからない。

それでも覚えている。

この、心が、体が。

覚えてる。

ふわりふわりと雪が降る

サラリサラリと雪が降る

全てを隠すように

全てを覆うように

全てを　　壊すように

死の雪が　　降る

ゆっくりと瞳を開けると、視界いっぱい広がる白い空とその白さに反射する煌めき。

そして、優しい歌声で奏でられる、どこまでも狂氣的な歌。

「わた…し？」

「ああ、起きたのか…思ったより早かったな」

自分自身がおかれた状況が理解出来ずに呟くと、横から声をかけられた。素直にその声の方を向けば肩膝を立て空を見上げて座るトア

がいた。

「さっきの…歌」

「歌?…あれか…わりい、うるさかったか?」

「違う…綺麗だった」

その言葉に一瞬、虚をつかれたように言葉を失うトアを不思議に思っ
て起き上がろうと手に力を入れた時、触れた地面に違和感を覚え
た。

冷たい。まるで、氷に触れているように。

ハツとして上体を起こし地面を見ると、そこにはあるはずもない
ものが広がっている。

「…こ、れは?」

「初めて見るのか…聞いたことぐらいあるだろう?」

ジルは、体を震わせた。それは一瞬にして変わってしまった世界に
対して恐れを抱いたからではない。

ジルが、恐れを抱いたのは…

「これは晶破現象…」

「お前のことを、絶望に突き落とすものだよ」

恐れを抱いたのは、トアの。

どこまでも無感動に光る、その瞳だった。

晶破現象

【晶破現象】

『お前のことを、絶望に突き落とすものだよ』

ジルは、動けなかった。

告げられた言葉が非現実的過ぎて、己の耳を疑ったからもある。なにより、その何も映さない瞳が恐ろしいと本能的に思ってしまったからだ。しかし、トアの無感動なその瞳こそがその言葉は嘘ではないと告げている。

…ふと、その瞳が瞬き。普段の小波のような静けさを感じさせる瞳に戻った。

「あんまり怯えないでくれるか？」

「え…あつ、ごめんなさい、私そんなつもりじゃ…っ」

ため息をつきながら呆れたように言うトアにジルは慌てて言い放つ。けれど、そこからの言い訳を見つけられずただただ口を閉じてトアを見つめることしか出来ない。

そんな沈黙を破ったのは、招かれざる者の遠い声。

「…っ!?何…?」

「魔物の遠吠えだろ…思ったよりも早いな」

その、いつそ冷たいと思うほどに冷静な声音に…ふと、ジルは思った。た。

トアの視線の先、そこには、ジルの帰るべき場所が、ある。

「っ、女将っ!!!」

「なっ、バカ待てっ!」

考えるよりも体が先に動いた。

決して冷静とはいえない思考が渦巻く中で必死に走る。

(後ろで声がある。ひどく、焦りを含んだ声。…ああでも、そんな声などにかまっている暇なんてない。あの優しい人を助けなければ。幼い時、名前以外全てを忘れ、ただ死ぬのを待つしかなかった私を助けてくれたあの温かい人を助けるために…救うために。)

ジルは、走る。

視界が曇り、死に急いだとしても…

瞬間、ジルの頬を掠めた灼熱。

そして

「ふざけんのも、いい加減にしろ。」

頬から流れる生暖かい雫と痛みを攻め立てられるように後ろを振り返る。

そこには赤い髪をなびかせながらこちらを静かに見つめる人がいた。

(…あれは誰?…ううん、知ってるはず。だって、あの人は、)

「貴方は、わた、しの…」

その時、頬の傷に何かが触れた。

「いたいっ!?!」

「なに混乱してんだよ。馬鹿」

そこそこの力で触れられたそこは、しかしすぐに痛みが引いていった。

不思議に思っただけのことを見る。案外近くにあるその瞳。それにほんの少しだけジルは体を震わせた。トアはそれでも構わずジルのことをまっすぐ見つめ、言う。

「いいか? 晶破現象つてのは平たく言えば物質が結晶化することだ。晶雪(しょうせつ)と呼ばれる雪に触れるとなっちまう。それが生き物であろうとそうでなくても、だ。もちろん人間も含めてな…だがな、その中でも一番厄介で特別なものがある。それは魔物。…俺がもう少し遅かったら、お前死んでたぞ」

その言葉に、息が詰まった。

「ごめんなさい…」

トアの言う通りだった。冷静さを失ったあの状態のままだったら最悪の結果になっていた。止め方がどうであろうと、トアが目覚まさせてくれたことには感謝しなければならぬ。

瞳を伏せ、顔を俯かせるジルにトアは何も返さず彼女の手を取り歩き出す。

ジルは黙ってそれに従った。なぜならトアが目指す方向にはジルの故郷：宿屋ローゼスがあるからだ。

しかし、その歩みは突然終わりを告げる。

手を引かれながら、無意識に動いていた体は突然の停止に反応できずトアの背中にぶつかることと強制的に動きを止めることになった。

トアのその静止を不思議に思い、俯かせていた顔をふとあげると、視界いっぱい透明の輝きが映る。

それは、酷く美しかった：残酷な程に。

「あつ、あああああああああ：っ!!!」

ジルは、泣き叫ぶことしかできなかつた。

ジルが見たのは、

「これが、晶破現象：クリステイアだ」

宿屋ローゼスがある小さな村を簡単に飲み込んでしまった、大きな大きな一つの水晶だった。透ける水晶の中には、恐怖に歪んだ人々が映っていた。

美しく、残酷な程に……………。

「泣き叫び、己のことをただ責める少女のことを見つめる少年はただ、告げた。」

「助けたいか？この場所を、この命を」

少女の体が震える。

「戻りたいか？お前の幸せの中に」

力なく地面に置かれていた手がゆっくりと握られる。

「なら…俺とこい」

俯かせていた顔を少女はゆっくりと上げた。

そして、ただ告げる。

少年は、少女が伸ばした手をしっかりとつかんだ。

旅立ちと

泣きすぎて、赤くなった顔が水面に映る。それを洗い流すかのよう
に勢いよく、服を身につけたまま水の中に飛び込んだ。

何の音もしない、静かな水の中。

瞳を閉じてただ、水の揺りかごに身を任せる。

しかし、その時間は長くは続かず。酸素を追い求めるために、揺ら
ぐ水面に手を伸ばした。

「準備は済んだか？」

「…いたのっ!？」

水面から顔を出した瞬間、あつたのは呆れたように瞳を細めながら
こちらを見つめる少年の顔。

「だってあんた、入水自殺しようとしてるんだもん。」

「するわけないでしょ!!!」

常になく可愛らしい言葉遣いで語りかけてくるトアに大きな声で
返す。トアは「はいはい」と適当な言葉を発しながらこちらに手を伸
ばした。ジルは素直にそれに従った。

「…で、準備はできたのか？」

「うん、もう平気…泣いてても何も変わらないんだってこと、わかった
から」

言いながらジルは水から上がり、ずぶ濡れの服をどうしようと考え
る。こんなふうに濡れてしまうのならば初めから脱いで入るんだっ
たと今更ながらに後悔した。

後悔。

その言葉に、胸がジリジリと焼ける感覚に陥る。すつと遙か彼方を
見やれば、そこにはクリスティアとなり大きな一つの結晶と化した故
郷がある。

…戻さなければ、戻らなければ。そのことばかりが頭を覆い尽く
す。そんなことを何度も繰り返すしかできない思考を振り払うよう
に頭を数度振る。トアよりもかなり短い髪から水滴が飛び散った。

「あんたさ、あつたかいといえど風邪引くだろ…」

そんなジルの様子を見てられないとでもいうように、トアはジルに向かつて手をかざした。瞬間、水滴は弾き飛ばされ服が体にこびりつく嫌な感覚も消えた。

「ありがとう」

「出発早々風邪なんかひかれたら溜まったもんじゃないんでね…
じゃ、行くか」

「…うん」

一瞬の間があつたのは振り返つた視線の先にある故郷が気がかりだからだ。

その故郷の変わり果てた姿を思い出す。優しい人達の恐怖に満ちた顔を思い出す。

…全ては、取り戻すために。

「今、行く」

この手の中に、すべて取り戻すために。

瞳を開けるとそこは見慣れた天井。

遠く聞こえるのは鳥のさえずり。

その音に耳を傾ければ、ほんの少しだけ心が軽くなるような気がした。

朝日が差し込む窓辺に立ち、遙か彼方。彼女がいた湖を見る…正確には湖が「あつた」であろう方向を見る。

けれど、どんなに一途にそれを見つめても、彼女はその姿を表すことはない。

「お前は、どこにいる？」

呟いた言葉は風に乗る、そして誰にも届かずに消えていく。

【新たな出会いの可能性について】

造花の花

二度目の厄災と衝撃的な出会いと

ジルの故郷を飛び出して早数日。

歩けど歩けど見えるのは一面の緑だけ。

平たく、わかりやすく言おう。

「…トア。これって…?」

「迷ったなあ〜」

間延びした、呑気な声でそう告げるトアにジルは叫ぶ気力さえ奪われ頭を抱えるしかなかった。

旅を初めてから数日。二人はジルの故郷からすぐそばにあるという町「リリネル」を目指して歩き続けているが、不運なことに道に迷ってしまった。

別に野宿などに不平不満を言うわけではないが、数日それが続けば流石に体が悲鳴を上げてくるのは必然なこと。

その上…

「たくっ…またかよ」

「文句言っていないで！くるよっ!!」

ため息をつきながらトアは腰につけた鞆から二振りのガンブレードを抜き取り、ジルは太ももにつけたガーターベルトから細い掌に乗るくらいの棒を取り出した。ジルはそれをおもむろに振り下ろす。するとそれが金属音をたてながら彼女の背丈ほどの長さに伸びた。

「いつ見ても面白いな、お前の武器」

「それ、褒めてる?」

トアは呆れたように瞳を細めるジルに小さく笑い、眼前の敵に瞳を向ける。そして迷わず地をかける。

「さっきから…うぜえんだよ!」

狼の形をした魔物に、トアはその剣を振り下ろす。それは見事にその魔物の頭を直撃し血しぶきを上げながらそれは倒れた。未だ生き

ているそれに、トアは止めとでも言うように二振り目の剣…否、銃を向け引き金を引いた。

それを横目で見ながらジルは長く伸ばした棍棒で、狼の魔物に紅の衝撃波を与える。

「紅破っ！」

それは見事に魔物に当たり、敵を後方に飛ばす。動かなくなったそれに目を向けず、ジルに迫る魔物に瞳を向ける。

迫り来る魔物に恐れることなく自身の武器を向ける。飛んでいる敵を地に落とし、地にいる敵を地面に叩きつける。その度上がる悲鳴にも似た雄叫びに心が引き裂かれるような心地になる。

それでもジルはその武器を振るい続けた。

「…」

そんな様子をトアは目の前の魔物を倒しながら大きくため息をつき、呆れたように見つめていた。

程なくして戦闘は終わりを告げ、二人は少しの休憩を挟んだあと再び歩き出す。

なにか言いたげなジルの視線をトアはあえて無視しながら無言のまま歩き続けること数時間。日差しが陰りを見せてきた頃。ふと、目の前に見えたものがあつた。

「えっ…」

それは、忘れもしない光景。

どこまでも残酷で、美しいもの。

「これ…って」

掠れて聞き取りづらいジルの声。それを耳にしながら、やはりどこまでも無感動な声でトアは言った。

「クリスティア、か…」

それはまるで花のように広がる、澄んだ水の色をしていた。

「そこそこデカイな」

「うん」

「人はいないみたいだが…」

「うん」

「お前の故郷とはまた違った水晶にも見えるような…」

「うん」

「…おいおい、大丈夫かよ」

「うん」

「…」

完全な水晶になっている地面をコツコツと音を立て進む。その間にどこまでも無感動な声と瞳でトアは話す。それをジルはボンヤリと聞き流していた。

当たり前かもしれない。自分の大事な居場所を奪われたと思っただけにそれと同じ惨劇を目にしてしまったのだから。

けれど、そんなことは彼には関わりもない話なわけで。

パンッ

「きやつ!?!」

突然の音。それに驚いたジルは思わず大きな声を上げる。その様子を優しい瞳でクスクスと笑いながら見る少年がいた。

「ト、トア…っ!」

「ククッ…悪い悪い、お前がかなーり真面目な顔して悩んでたから…
っい」

「人が真剣に悩んでたのに!酷いわトアっ!!」

「だから、悪かったって」

「そんな態度じゃ反省なんてしてないじゃない!!」

話しながらもなおクスクスと笑い続けるトアのことを非難するように睨めば「おー怖い怖い」と、どこか楽しいにも聞こえる声でやっつと笑いを収める。いや少し怪しいが。

…その時、そんなおふぎけにも似た会話を打ち消す、冷やかな声が突然放たれた。

「…ここで、何をしています?」

ジルはハッとした顔で顔を上げ、トアは素早く己の武器に手をかけ、鋭い瞳でその人物を睨みつける。が、トアが振り向いた瞬間。そ

の男は苦しそうに、そして悲しげにポツリと呟いた。

「…シル、ヴィア…？」

「え？」

その声は緊迫したその場に似つかわしくなくらいによく響いた。困惑しているジルを横目で見ながら、トアはその男に語りかける。

「悪いがこいつの名前はシルヴィアなんてもんじゃねえよ。」

しかし、トアのその声を否定するようにその人物は首を振り。トアに近づくように歩みだした：敵意は感じない。しかし油断はできない。トアは未だ武器に手をかけている。

その男が目の前に来る。そして、おもむろに右手をトアに向け…

「シルヴィア…では、ない？」

「…は？」「え？」

トアとジルは同時に怪訝そうに眉根を寄せ、その男を見る。当たり前だ、その男はトアのことを女と間違えているのだから。

「どこにいるんですか…俺の、シルヴィア…」

落胆したように、トアのことを抱きしめるその男に、ジルは言葉をなくした人間のようになただただ口に手を当てトアだけを見つめている。トアはそれを呆れたように、困ったように見つめた後。その男を力づくで引き剥がし己よりもかなり大きいその男に尋ねた。

「近くで飯食えるところはどこだ？」

「いや！普通この人のこと聞くでしょう!？」

トアのマイペースな質問と、ジルの鋭いツツコミはその男を小さく笑わせるには十分な効果を持っていたのだった。

——「お前が探しているそのシルヴィアってやつさ」

少年が、冷たい瞳でその男を見つめる。

「…お前が殺したんだろ？」

その男は粘着くような微笑みを浮かべた——

箱入り娘（？）と昔語り

突然笑い出したその男の笑いが収まるまで数分たった頃、トアは改めて口を開いた。

「…で、一体あんたはなんだ？」

不躰にも思える言葉にジルは慌てるが、その男は奥することなく返した。

「それを聞きたいのなら、自分から名乗るのが礼儀ではないんですか？」

強きな返しに、トアが再び不躰な言葉を放つのではないかとジルが心配したが、

「それもそうだな…俺の名はソラルトリア・ディアント。長つたらしいからトアで構わない」

予想外なことには彼は素直にその質問に答えた。その様子に啞然として固まってしまったジルだが、トアに顎でさっさとしろとでも言うような仕草をされ、ようやく自身が失礼なことをしていることに気づき慌ててそれに続いた。

「私はジリイーナ・スエロです。私も呼びにくいと思うのでジルと読んでください」

ペコリと頭を下げてジルが言い終わると、その男は一つ頷き、二人の言葉に答えた。

「自己紹介ありがとうございます。トア、ジル…オレの名前はアンフェール。アンフェール・ロドリゲス…リリネルで職人をしているただの一般人です」

「え？…ロ、ロドリゲスっ!？」

「知り合いか？」

その名前を聞いた瞬間、ジルは叫び声を上げる。そして、信じられないようなものを見るように自身の目の前にいる男…アンフェールを見つめた。その様子にトアは怪訝そうに首をひねる。

「知り合いなんてとんでもないわ！彼はリリネルで最も美しい作品を

創りだすと言われている、職人よ!!」

「ふーん…有名人？」

「普通なら合うことだって難しいくらいね！」

興味がなさそうな顔で答えるトアに、ジルは嬉しそうに話す。けれど、その喜びを打ち消すようなどこか切ない響きを持った声が放たれた。

「いえ…オレはもう職人なんてな乗れる立場のやつではないですね…だって、」

そこで言葉を切り、アンフェールは悲しげに細めていた瞳をそつと閉ざし

「だって、あの日から…オレは何も作れていないのですから」

その言葉を聞いて息を呑んだように言葉をなくしたジルを見て、アンフェールは困ったように微笑んだ。

「そんな深刻な顔をしないでください…俗に言う、『スランプ』と言うやつですから」

「そ、うなんですか…」

優しく微笑まれてもなお、気まずそうに視線を泳がせるジル。それを呆れたように見つめていたトアは、彼女に言葉をかけてやろうとして、ふとあるものに気づき軽く目を見張る。

そして、そつと己が首から下げている青い石のついたペンダントに触れ、小さい声で呟いた。

「湖の姫君の加護、か…」

その瞳はどこか冷ややかだったが、それに気づくものは誰もいなかった。

それからトアとジルは、アンフェールに再びリネルまでの道案内を頼み。無事、とりあえずの目的の場所、物づくりの里リネルまで辿り着くことができた。その上…

「そんな！道案内だけでもありがたいというのに泊まる場所まで用意してくれるなんて、悪いです!!」

「気にしないでください、ジル」

「で、でもっ!!」

その上、アンフェールは笑顔で宿屋の代わりに自宅の近くにあるアトリエとして使っている小屋を貸してくれるというのだ。慌てるジルを見て、アンフェールは「ただし、」と人差し指でおもむろにトアを指差した。そして、話の蚊帳の外にいた彼に言った。

「ただし…トア。君がオレの次の作品のモデルになってくれたらの話ですけど…ね?」

「はあっ!?!」

そんな爆弾発言をされて、トアは初めてアンフェールにきちんと視線を向けた。

「あんた、言っとくけど俺は男だぞ?」

「そうですね。少女にも見えますけど?」

「美意識とか全然無いから」

「そんなものは持ってなくてもどうとでもなりますって」

「そもそも頼むんならそっちの奴に頼め。縁起もいいだろ」

「それは、彼女が青く、君が…紅いからですか?」

「…」

怒涛の攻防戦を繰り広げていた二人。けれど、ふとトアが口を閉ざす。その瞳はどこか困ったように細められた。それを不思議に思ったジルは、コクリと首を傾げる。

「色なんて…関係あるんですか?」

ポツリと自然にこぼれた疑問に、アンフェールは一瞬ポカンとしたように目を見開いた。

「知らないんですか? 短いですが、有名な古いお伽話ですよ?」

「お伽話?」

次はアンフェールがジルに質問するが、彼女はそれでも首を傾げるだけだ。

その時、まるで歌のように言葉を紡ぐ声が聞こえた。

『そして世界は救われるだろう』

紅を纏いし少女を生け贄として

そして平和は訪れるだろう

青を纏いし少年が導きし大地に

世界は救われるだろう平和は訪れるだろう
血に染まったその手と引き換えに』

瞳をふせて、トアは厳かに告げた。

その声と内容にジルは体が無意識に冷えていくのを感じた。

「…怖い、内容なんですね」

「まあ、そうですね…ですが、所詮お伽話です。気にすることはありませんよ」

それを感じ取ったのか、アンフェールはあえて明るくそう告げ「覚えましたか？」と確認するようにジルに言う。素直に彼女が頷くのを見た後、苦笑のような笑みを見せた。

「先程も言ったように、これは『所詮お伽話』なのですが…いかんせん、語られている月日が長い故か赤い色をしたものは不吉なもの。逆に青い色をしたものは縁起がいいものだという風習が世界中に広まってしまったんです」

「そうだったんですか…」

感心したように、けれどどこか悲しそうに瞳を伏せるジルにトアは溜息だけをつく。そして改めてアンフェールを見て、

「とりあえず、モデルのことだが…そもそもあんた俺がそんなことやって作品作れるわけ？」

と、疑いの色が交じる瞳を向ける。そのあからさまな話題の換え方とジルへの優しい気遣いにアンフェールは気づかないふりをして答えた。

「君ならできそうな気がするんだ」

「あつそ…なら、いいぜ」

そして、次は呆気無く告げられた了承の言葉に再びポカンするしかなくなる。彼女にとっては衝撃的な話を聞かされたジルも同様にだ。

そんな過剰とでも言っているいい反応にトアは瞳に避難の色をのせた視線を二人に送った。

ふと感じた粘着くような視線。
その正体など、まだ誰も知りはない。

お宅訪問と洒落こもろ

「散らかっていて申し訳ないですが…どうぞ、好きに使ってください」
「そんなことないです！本当にになから何までありがたいがとうございませ
…っ」

「そんなにかしこまらないでください。オレ達は対等な立場でしょう
？」

二人はリリネルのアンフェールの自宅のそばにある小さな小屋を、
トアがある条件をのむことで、宿屋の代わりに使わせてもらうことにな
った。

「確かに宿代が浮くのはかなり助かる。助かるんだが…」

何度も感謝の言葉を口にするジルにアンフェールは優しく声をか
ける。そんな和やかな雰囲気の二人を横目で見ながら、疲れたように
ため息をつく少年がいる。言わずもがな、トアだ。

「助かるんだが…なんですか？」

そんな様子に目敏く気がついたのはアンフェールだ。視線をジル
からトアに向け、いたずらっ子のように首を傾げる。その挑発にも取
れる行為に、トアは少しも乗ることなく逆に呆れたように瞳を細め。
「さつきは了承しちまったが…男がモデルでいいもんでいいのか、か
なり心配だ」

と、至極まじめに言い放った。けれど、アンフェールは心底驚いた
かのように息を止めてトアをただ見つめる。

「？、なんだ？」

「いえ…オレ達は、いわゆる『契約上』の関係ですよ」

その言葉にトアはアンフェールの隣で男二人の会話に耳を傾けて
いたジルに視線を移し、再びアンフェールに視線を向け、はつきりと
言った。

「ま、そうだな。利害の一致ってやつだ」

「そう、ですよ」

ホツとしたように、けれどどこか悲しげにも聞こえる声音にジルは
無意識にトアに顔を向ける。トアと出会って日は浅いが、こんなふう

に誰かが落ち込んでいたり悲しそうな顔をしている時のトアは頼りになるということくらいはわかっている。

そして今回もそうであったようで。

「けどな…俺達だけがいい思いをするのはフェアじゃない…俺達は対等だつて言つてたよな？」

「あつ…」

薄く微笑みを浮かべて幼子に語りかけるように言葉を発したトア。そんな彼に、アンフェールは困惑した顔をした。

「つまり、トアはアンフェールさんにいい作品を作つて欲しいって言つてるんですよ」

「そんなことは言つてません」

トアの言葉が終わるのを待つてから、ジルが言う。その言葉の内容は、トアにとつてはお気に召さなかったようだがこのさい無視してしまつたほうが勝ちだと言うが如く、トアの珍しい敬語を無視して明るい笑顔をアンフェールにかける。

そんな優しい不思議な二人のことを見て、アンフェールもほのかに微笑みをこぼす。

「ほんと、変な人たちですね。貴方達つて」

それを見て、ジルは花が咲くように笑い、トアは本当に小さく笑みを浮かべた。

その後、トアとジルはアンフェールの家でお世話になりながらリネルのそばで発生した晶破現象のことについて調べていた…が、

「思うように情報が集まらないね…」

「まあ、そんなもんだろ」

有力な情報を得ることができず、ただ時間だけが過ぎていた。

「それに、いきなりあたり一面が水晶になつちまうだ。そんな物、眼の前で見せられたら怖いし、何より思い出したくもない光景になつちまうんじゃないか？」

「…そう、だよね」

「ま、あんたもそうだろう？」

「…っ、」

何気ない言葉に息をつまらせるジルに気付いたトアは、内心ため息をつきつつ話題を変えた。

「ところで、アンフェールの創作活動は終わったわけ？」

「んー…それはまだみたいだけど？…って、トアのほうが詳しく知ってるでしょう？」

「まあそうなんだけどな…参考に？」

「意味がわからないよ…」

「自分以外の意見を聞きたかったんだよ。深い意味はない」「そっか」

そんなトアの気づかいを感じ取ったジルは、無意識にホツとしたような顔をしながら微笑んだ。

それからトアとジルは、1時間ほど村の中で再び情報収集に勤しむことになった。ちなみに2つに分かれないのはトア曰く「一人じゃ危なっかしい」だそうだ。

「すみません。ここの近くの湖のことを聞きたいんですが…」

「湖？リーンの泉のことかい？」

「はい」

「うーん…それなら村長に話を聞くといい」

「村長？」

そんな情報収集という名の村探索も、例に違わずなんの収穫もないまま終わるように思えたが、今回は違うらしい。

「グトン村長って言ってなあ、本当に優しい方でこの村ではアンフェールが産まれるまでは一番の造花の作り手だったんだ」

「ふーん…で、なんでそのグトン様々に話を聞くといいんだ？」

「そりや、リーンの泉がああなった時…それを一番見つけて巻き込まれそうになったアンフェールを助けたのは、何を隠そうあの人あの人だからな」

「えっ!？」

突然の有力な情報にジルは嬉しそうに顔をほころばせたが、トアはすっとその瞳を細めた。

その村人曰く、村長は村の中心部にある大きな木の隣に家を持って
いるということだった。トアとジルは、その家を目指し少し赤くなっ
て空を背にして歩き出した。

「…お優しい村長様…ねえ？」

どこか嫌悪感をにじませる声でつぶやいたトアの声に気づかず
に。

紅茶色の密会？

「ここが…村長の家？」

「らしいな」

赤く染まる空を感じながら、村長の家である大木の根本まで来た二人だった人が、

「…おつきいね…」

「大豪邸、というわけじゃないが…ここではかなりでかいだろうな」
その外観になんとなく気後れしてしまい、その建物をボンヤリと見つめていた。

しかし、二人の背後からわざとらしく足音をたてながら近づく影があつた。トアがそれに先に気づき何気なく振り返りながらも、そつと腰にあるガンブレードに手をそえる。

しかし、そこに佇んでいたのは

「こんなにお若い方たちが…こんな古いぼれの家は何用かな？」
「。。。」

警戒を吹き飛ばすような呑気な声音。

トアは珍しく困惑したようにその声を発した老人を見つめている。それにほんの少しだけ視線を向けた後、ジルは思い出したかのようにその老人に向き直り言葉を発した。

「あ、貴方が村長さんですかっ!？」

と、無駄に大きな声で質問した。

ジルは、自身の声の大きさに顔を赤く染める。それを冷静になったトアが冷たい瞳で見返した。

瞬間

「はははっー!」

若々しい声で村長と思われる老人は朗らかに笑い、聞くものを安心させるような声音で二人に語りかけた。

「いかにも…わしがこの村の村長のグトンじゃ…よろしくの、元気な若人たち」

柔らかく安心させるような声音でその老人は二人に答えた。

その後二人はグトン村長の家でこれまでのことを話した。時折何かを堪えるように顔を歪ませるジルに、グトン村長はゆっくりとひとつ頷くだけで何も聞いてこなかった。ジルにはその気遣いが何よりもありがたかった。

「…と、いうことなんです」

「そうだったのか…まさか、あの村が…」

そして話を聞き終えたグトン村長は心を落ち着かせるように自身で入れた紅茶を少しだけ飲み、そしてジルに優しく言った。

「辛いことを話してくれてありがとう…わしも、なにか手伝えることがあったら何でもしよう」

「…っ！ありがとうございます」

その温かい言葉は、ジルが抱えていた冷たい何かを解きほぐすような力を持っていた。ジルは安心したように微笑んだ。

不意に、そんな優しい空気の中にカシャンと小さな音が響く。ジルの隣に腰掛けていたトアがティーカップをソーサーに戻した時にたった音だろうが、その音だけでトアはその場の空気を変えた。

「手伝えることがあったら何でもする、ね…ではグトン村長さん。あなたにいくつか聞きたいことがある」

その声の主は言わずもなトアだが、言い放った言葉はどこか刺々しくいつもより荒い。抗議しようとジルがトアに声をかける前にグトン村長が「何かね？」とやはり優しく問いかけた。

「1つはこの村のすぐ近くのリーンの泉の晶破現象…その第一発見者はアンフェール…それは間違いないな？」

「ああ。あの子はリーンの泉で一日の半分を過ごすことが日課のようなものだったからなあ…あの日もいつものように行っておったよ」

「日課？」

グトン村長が口にした気にかかる単語。トアは疑問を隠すことなく言葉にする。

「そうじゃ…あの子は毎日リーンの泉に行き誰かに合っていたそうなんじゃよ。」

「それは？」

「すまんが、わからんのだ。アンフェール自身、それが誰なのか教えてくれることはなかったからのお…」

「村長さんにその人のことを言っていないってことは…他の皆さんにも言っていないってことだよね」

ジルが確認のようにグトン村長に声をかける。彼は小さく、しかしはつきりと頷いた。

「わかった。じゃあ2つ目だ…さっきの話が本当だとするならば、アンフェールは第一発見者だが晶破現象、クリスティアに巻き込まれたはずだ。なのになぜあいつは無事なんだ？」

「それは…すまんが、わしにはわからんのじゃ。知つての通り、晶破現象に巻き込まれたら最後、体が水晶のような鉱石となってしまう」

「そうだ、そして…今のところ、その現象の対処法は、ない」
「その通り、なのだが彼は生きていた…ああ、そういえば…」

真剣な顔で話をしていたグトン村長は、ふと何かを思い出したかのように左手を顎に当てた。親指には青い宝石がつけられた指輪をしている。

「…何か思い出されたんですか!？」

ジルはその素振りを見逃さず、身を乗り出す勢いでグトン村長の次の言葉を待った。グトン村長は「あまり関係があるとは思えんが…」と前置きした後顎に当てていた手を外し目の前に置かれたティーカップを持ち中に注がれた赤色にも見える液体を見ながらささやくように言った。

「アンフェールはの、気絶しながらもうわ言のように何度も何度もつぶやいておった…それこそ、悲鳴のような声で…」

『『シルヴィア』と、』

目を見開くジルの隣で、トアは静かにティーカップに残った紅茶を飲み干した。

真実を暴いていきましようか？

村長から話を聞き終えた二人は、夕食の誘いを丁重に断りアンフェールがいる彼の家に戻った。その時にはすでに日は落ち、辺りは静まり返っていた。

「…シルヴィアって…」

そんな中おもむろにジルは重い口を開く。トアはそれに一瞬視線をジルに向け

「アンフェールに初めてあった時に俺と間違えたヤツのことだろうな」

「なら、トアと似てるってことかな…？」

「どーだろうなあ…髪色とかで間違ったんじゃないか？」

「…それは、自分が女顔って認めるってこと？」

と、ジルはそれを口にしたことをすぐに後悔した。目の前にはジルのことを忌々しそうに睨む青年がいたからだ。しばらくそのままの状態で歩き続けたが、ふとトアがため息混じりに別の話題をふつてきた。

「シルヴィアってやつのことをアンフェールにきいて見る必要があると思うだな」

未だ瞳の色は厳しいままだがジルから視線をそらし、その上これからやるべきことについての話題まで提供してくれたトアに感謝しながらジルは今度こそトアを怒らせるような言葉を言わないように注意しながら言葉を発した。

「そうだね。今やれることって言ったならそれぐらいしかないだろうし…」

「それじゃそれで決まりだな」

その言葉の後は少しの沈黙が流れる。たまらなくなつてジルは「トアっ」と震えているようにも聞こえる声で呼んだ。

「何だ、お化けでもいたか？」

その声には彼は苦笑混じりに応える。ジルは「読んでみただけ…」と返しニツコリと笑う。それにトアは苦笑しながらため息をこぼし、再

び無言で歩き出した。

それを見ながらジルは小さな声でつぶやいた。

「ねえ、トア…」

その先を、ジルはつぶやくことはなかった。

アンフェールの家に着くと、家に灯りはついていなかった。代わりに、彼のアトリエであり今はトアとジルが寝泊まりをしている小屋の方に小さい光が漏れ出ていた。

「アンフェールのやつ小屋で何してるんだ？」

「んー…私達の帰りでも待っててくれてるのかなあ？」

とりあえずと、ジルは首を傾げながらも小屋のドアをノックし「アンフェール、いるの？」と声をかけようとしたが何かに気づいたような顔をしたトアに腕を取られてそれを阻まれた。

「なに？」と仕方なくトアに聞こうとするけれど、それすらも人差し指をたてそれを口元に当てているトアに止められる。彼女は不服そうにしながらも素直にその指示を受け入れた。それを確認したあと、トアは口元にあった指でアンフェールの自宅をさした。相変わらず無言だが、言いたいことは分かったのでわざとため息をするしぐさをして頷いた。トアは珍しく優しく微笑んでジルの頭を撫で、声には出さず「行け」と言った。

ジルがうらめしげにアンフェールの家に入るのを見届け、改めて小屋に目を向ける。心を落ち着かせるように形だけの深呼吸をしてドアを叩いた。

「…誰です、」

聞こえたのはかぼそく、けれど重苦しい響きを持った声。ある程度は予想していたが、これほどとは。

トアは無意識にため息をつき「ソラルトリアだ」とあえて自身の長い名を言った。しばらく流れる沈黙。トアは「入ってもいいか」と聞いた。アルフェールは応えることはしない。紅色の少年はそれを了承と受け取り小屋の中に入った。

「…まだ、何も行ってはいませんよ」

「そうだな。だから都合のいいように解釈させてもらった」

「貴方って人は…」

そこには椅子にだらりと腰を下ろし紅色の少年を睨むように見つめる青年がいた。青年は、気だるそうに少年を咎めたが、逆に開き直られてしまった。

ふと紅色の少年は薄く笑うと、青年に一步だけ近寄った。

「お前に、聞きたいことがあるんだが」

「なんです？」

貼り付けたような薄い笑を崩さずに、紅色の少年はまた一步青年に近づいた。

「この村の村長さんから全部聞いたよ。あんたが最初にあの惨劇の場所にいたってこと、そして何より…」

そこで言葉を切り、「言いたいことはわかるよな？」と紅色の少年は今度は動かずにじっと薄い笑を青年に向ける。青年は一瞬驚いたように目を見開いたが、すぐにその瞳に疑惑の色をにじませた。

「貴方は、『彼女』のことを…彼女がどこに行ったのかを知っているのですか？」

しかし、それでも青年はさすがのような声で紅色の少年に問う。

「さあ…なんのことやら」

けれどトアはその声に応えない。未だ張り付いている笑みが不気味に思えるほどにトアは穏やかに語りかけた。

「それはお前が一番わかっているだろう？」

ビクリと肩を震わせ言葉もなく紅色の少年を見つめる青年に…アンフェールに、紅色の少年は優しく、けれどどこまでも残酷に突きつけた。

「わかっているんだろ？シルヴィアを殺したのは…」

その言葉をかき消すようにアンフェールの叫び声が響いた。

灯りをつけてただ一人、トアとアンフェールを待ち続ける少女はふ

とつぶやいた。
「なんだか…嫌な天気」

さてさて答え合わせの前に息抜きを

アンフェールの家に戻り、灯りをつけてただ時を待っていた私は言葉にできない不安を抱えながらただ時間が進むのを待っていた。部屋の中央にあるひとり暮らしにしては大きなテーブルとそれを囲むように置かれた椅子に腰掛けながらただ外を見続ける。

ふと、なんとなく見ていた空が曇ったように思えて私は小首をかしげる。

「なんだか…嫌な天気」

無意識にそう告げて、視線を外した。見ていると嫌な気分になってきたから。

小さくため息をつくと同時に、木がきしむ音と2つの足音が響いた。ハツとして振り向けば予想通りの二人がいた。

しかし

「…どうしたの？アンフェール…」

トアよりも大きな青年が何も言わず、ただ俯いている。グツと唇を噛み締め、苦しげに息をしている。

「ねえ、何が…」

言って無意識に伸ばした腕は、しかしアンフェール本人に阻まれた。

「…少し、アイデアに行き詰まってしまいました…それをトアに手ひどく責められてしまったんです」

「俺のせいだよー」

そう言いながら作り物のような笑みを貼り付けて話すアンフェールと、やる気がなさそうに応えるトア…は、いつものことなのだが…それでもその瞳をの奥は何かを隠すようにまたたいているように見える。

その瞳を見た瞬間、先程から感じていた恐れにも似た不安感が更に増したような気がしたが、結局二人にうまくかわされてしまい、何も言い出せないままその日が終わってしまった。

そして、翌日。

「…すごく天気が荒れてるね…」

「そうですねえ…これでは洗濯物を干すこともできません…」

ハア…と、重々しくため息をつきながら嵐が来たのかと錯覚させるほどに激しく降る雨を私とアンフェールは見ていた。

「まあ仕方ないだろうなあ…昨日は星なんてもの一つも見えなかったし」

「でもトア、これは流石に…」

「ま、降り過ぎつてもんだな！」

そんな私達を面白そうに見ていたトアが、どこか楽しげに声を掛けしてきた。その上いつもより声の感じが明るい気がする…？

不思議に思っつて、アンフェールと見つめていた窓から視線を外しトアのことをじっと見つめる。それに気づいたのか、鼻歌を歌いだしそうなほどに機嫌がいいトアがハツとしたような顔をした後、気まずげに視線をそらし、しばらくして観念したように言った。

「…雨が降るとなんとなく気分がいいんだよ…多分、俺の属性的なの水だから」

そっぽを向いてそう早口にいうトアが、なんだかいつもより可愛く見えてアンフェールがいるのにも関わらずそつとその頭を撫でてしまった。するとトアはありえないものを見るように瞳を大きく開けて言葉もなくこちらを見つめ、アンフェールには大笑いされてしまった。

この時、不思議なことに昨日から続いていた不安感かいつの間にかどこかにいって、この穏やかな時間が心に刻まれた傷を少しだけ癒やしてくれた気がして…私はトアとアンフェールに気づかれないうようにそつと息をはいた。

ふと、一人外の窓を見続けていたアンフェールが音にならない声で呟いた。

「…シルヴィアを、殺したのは…」
『先生』だ。

悲しみなんてほんの一瞬だしすぐ忘れられるし

トアとジルが村長宅をご訪問した日の次の日から降り続ける雨はその翌日も勢いを衰えさせることなく降り続けた。

アンフェールはそんな空を見上げて、ふと独り言を呟くように言った。

「…おかしい、こんなにずっと雨が降り続けるなんて…」

「確かに、こんなに雨がずっと降りやまないなんてありえないことかもだけど…偶然じゃないかな?」

ジルはそんなアンフェールの言葉に応える。しかしそれでもアンフェールはジルのことを否定するように首を一つ振り、靴音を響かせながら窓際まで歩いて行き外の様子を静かに見つめはじめた。

そこから落ちる沈黙。どこか重苦しい空気が壊れたのはガリツというどこか不愉快な音。ジルが振り返れば、長方形の可愛らしい包装紙を揺らしながら瞳を細めて飴玉を噛み砕いているトアが、椅子に体を投げ出すように座っていた。テーブルには彼の愛用しているガンブレードが立ってかけられている。

「トア…お行儀がわるいよ?」

「…」

そんなトアの行動にため息をつきながらジルが言うけれど、紅い少年は砕いた飴玉を飲み込むだけで応えることはしなかった。

そして、テーブルのガンブレードを腰につけドアに向かって歩き出す。

「…え? ちょっと、トアっ!」

「なに?」

慌ててジルがトアの腕を取り、彼を止める。訝しげにジルをトアが見た。アンフェールが二人を振り返る。

「どこ行くの?」

「んー…散歩」

「…こんな雨の日に、ですか?」

「まね。それに、俺には雨の日だろうと晴れの日だろうとあんまり変わんないしな」

「でも…」

「すぐ帰ってくる。ホント心配性だなアンタは…あ…それとアンフェール！こいつのこと頼むな」

けれどトアは二人遠回しの静止も聞かず、アンフェールにそう言い残し、ジルの頭を一度撫でるとスルリとドアを開け雨の中に消えた。

止めようと伸ばした腕は、けれどどこか恐ろしい背中に阻まれる。

「トア…」

「大丈夫ですよ。彼もすぐ変えると言っていたですし…とりあえず紅茶でも飲んで落ち着きましょう？」

「そう…だね」

そうしてもう見えない姿を探すように遠くを見つめるジルを促しアンフェールは家のドアをゆっくりと閉めた。

パシャパシャと周りで音がする。しかしそれで彼自身が濡れることなどない。雫は全て彼を濡らすのではなく守るように彼を包み込む。そうしてどこも濡れることなく歩き続け着いたのは巨木の下。

「さて…」

一言。無意識に出た言葉を投げ出すと、彼は躊躇いなく扉を開けた。

そして、見つけた。

彼は無感動な瞳でそれに言葉をかける。

「お前が探しているそのシルヴィアってやつさ」

少年が、冷たい瞳でその男を見つめる。

「…お前が殺したんだろ？」

その男は粘着くような微笑みを浮かべた。

そして、その顔のまま言った。

「どうしてわかったのかな？…トア君」

彼は静かに応える。

「アンタのしてるその指輪、普通のじゃないだろ？そんなによーい加護を持つてる代物簡単に作れるものじゃない」

「ふむ…やはり君は特別なようじゃな、これの価値をひと目で理解するなど…」

その男が上機嫌に指輪を見つめながら語る。

そして、扉の前に立ち続ける彼に瞳を向け粘着く笑みから心底辛そうに瞳を細めた。

「しかし残念でならんなあ…この指輪の価値を深く語り合える人とやっと巡り合うことができたというのに…」

『殺さなくてはならないなんて』

トアは呟いた。

「やあつと…本性表したな？」

無感動な瞳に激しい怒りを滲ませながら

「グトンさんよっ!!」

トアが叫ぶのとほぼ同時。轟音とともに鋭い槍が彼に向かって振り下ろされた。

「トアはどこ行っちゃったんだろ…」

「先程からそればかりですよ？そんなに心配しなくてもいいと思いませんが…」

「そう、なんだけど…やっぱり心配」

トアがいなくなって数分。ジルは不安そうな顔をしながら本日3杯目の紅茶をフーフーして飲みこむ。それでも少し熱かったのか、彼女は顔をしかめた。それを微笑ましく見ながら未だ湯気が立つ紅茶を飲む。ちなみにアンフェールは温かい飲み物は熱すぎるくらいで飲む。

「…よく熱くないね」

「まあ、熱いほうが好みですからね」

そうして不安感をぬぐい去るために雑談をしていると突如轟音が響いた。

「な、なに…?」

「…」

怯えるようにティールカップをキュツと握るジル。アンフェールはすぐに立ち上がり窓から外を見た。

「あれは…っ！」

しばらく外を見つめていたアンフェールは切迫した声を上げ、躊躇いなくドアを開け放ち外に出るとアトリエの中へ入っていった。

それを見届けてやっと我に返ったジルは、太ももに取り付けられた棍棒があるのかを確認しながらアンフェールの後を追った。

普通の蜘蛛は確か足が八つあり、『小さく』て動きがそこそこ速かった気がする。だから目の前の怪物を蜘蛛と呼んでいいのだろうか謎だ。

トアはそんな場違いのことをつらつらと考えながら大蜘蛛の槍のように尖った足の繰り出す突き刺しをステップで器用に避けていた。足の先端が地面に刺さっていくたびに轟音と泥の混じった土が舞う。

「キシヤアアアあっ!!」

「おーい、人語話せ人語を」

グドンだったその大蜘蛛は奇声を何度も発している。もうすでに人間としての意識がないのかもしれないと、トアはその無感動の瞳をひそめた。

と、そんなことを考えていたからだろう。雨でぬかるんだ地面に足を滑らせたトアは派手に転んだ。

「あ、ヤバっ…」

後悔先に立たず。そんなことわざが頭の中で再生されるかされないかの数秒の時間。トアは決して手をかけなかった武器をためらいもなく抜き、振り下ろされる槍に向かって銃口を向けた。

「連歌（れんか）」

そうして躊躇いなく左の引き金を引く。撃ちだされた弾丸は全て槍に命中した。トアはそれを確認する間もなく、白いコートが汚れるのも構わず転がりながら立ち上がり、大蜘蛛から距離を取るようにそ

の場から後ろに飛ぶ。

「二本目」

トアが言い終わると同時に、大蜘蛛が悶え苦しむように体をブルリと震わせた。

「痛いかな？だよなあ…でも、悪いな…手加減する気なんてないだよ」

吐き捨てるようにトアが言うのと、大蜘蛛は残った7本の足でなんとか彼を串刺しにしようと何度も槍を放つ。

しかし、それは鈍い金属音に阻まれた。

「…」

「…怪我は？」

トアのことを守るように前に立つ青年が握っているのは奇妙な形をした盾。トアは無言で頷いた。

すると、大蜘蛛が動きを止めた。そして青年を見つめた…：ような気がした。

「…先生」

雨の音だけがその場を包む。トアは静かに一つため息をつき、後ろから聞こえた足音に振り返る。

なにか言いたげな青い瞳に、けれど首を振り言葉を無くさせ再び青年へと瞳を向けた。

「どうして…：こんなことを？」

大蜘蛛が一步、アンフェールに近づいた。

「俺のことが憎かったのですか？」

また一步。

「何か…：なんでもいいから、教えてください」

足が、上がる。アンフェールが膝をついた。

「せん…：せい、」

振り下ろされる槍に、ジルが悲鳴にも似た声を上げようとして息を詰めたその時。槍が折れた。

「立て、アンフェール」

短く、告げられた言葉。アンフェールはゆっくりと顔を上げた。そこには彼が愛した彼女とよく似た、けれど違う面差しがこちらを見つ

めていた。

ぐつと。もう一度俯き、そして顔を上げアンフェールは立ち上がった。そして、真っ直ぐに前を向きながら告げた。

「トア、ジル…あれを…あの魔物を、倒します。手を貸してください」「仕方ないな」「もちろん！」

槍が降る。しかし、それは決して誰も傷つけることはできない。全て盾に防がれるからだ。それを見てトアは声を張り上げる。

「アンタは後方支援！俺が切り込むからアンフェールは…」

『守りを固めろ』と、言い終わらないうちにアンフェールは盾で足を一本切り落とした。

「守りと攻撃ですね？わかりました」

そして短く告げ大蜘蛛に向かって走り出す。トアとジルは一つ深呼吸をして

「氷結せし雫よ、降り注げ」

「小さな火の粉たちの悪戯」

迷うことなく詠唱に入ったわ

そうして一本。もう一本と足が使えなくなり最後の一本が動かなくなつた。

トアが進み出てそれに銃口を向ける。しかしそれをアンフェールが下ろす。

口元が、小さく動いた。

雨は、止まない。

青年は、静かに語った。

「知っていました。先生が彼女を使って…クリスティアに飲み込まれた彼女を砕いて、宝石として売っていたことなんて」

「それでも、オレは…オレに、生きがいをくれたあの人を殺すことができなかつた」

「オレは愛した人一人守れなかつた…愚か者です」

雨に濡れながら言った青年に、少年は言った。

「で、だから？」

「…？」

「死ぬと？」

瞬間、声が響いた。

「死んじや、だめ!!」

小さく少年が笑う。青年は驚いたように目を見開き。

「死んだら美味しいものも、楽しいことも、誰かを思い出すことだつて、できなくなっちゃうー！だから、簡単に死ぬなんて言っちゃダメ!!」

沈黙が、下りた。青年の口が小さく、震えるように動いた。

「…一緒に行くだろ？」

少年が雨の中に立ちすくむ青年に手を伸ばした。

迷うことは、数秒。ゆっくりと濡れた腕は乾いた手を弱々しく掴んだ。

その弱々しい腕を、2つの汚れた腕がしっかりと握った。

黒騎士

足元にはご注意ください

リリネルの村から出発してはや4日。アンフェールが少し呆れた声で言い放った

「ジルー、そんなに怒らなくてもいいんですよー」

「逆にどうしてアンフェールは怒らないの!?あの人たち間違ってるわ!!」

「んー…間違つてはないと思いますが…」

腕を組みながら本気で考えだすアンフェールに、ジルがまた何やら言っている。

そんな様子を見て、トアは今日何度目かわからないため息をついた。

時は少しさかのぼる。

大蜘蛛との大乱闘が終わり、一息つけるかと思つたのも一瞬。騒ぎが収まったので安全と判断した村人達が駆けつけてきた。

彼らはその惨状を見るや否や口々に言つた。

「グドン村長の家が…じゃあ村長は…っ!!」

「ああ、なんて事…」

「やっぱり、余所者なんて村に入れるべきじゃなかったんだ!!」

誰が言つたのかもわからないその言葉を初めとして、3人に対しての非難の声はどんどん上がっていった。

「お前達が村長を殺したんだ!」

「待って! 私達そんなことしてないわ!!!」

「うるせえ! この余所者め!」

罵倒の声は止むことを知らず、続く。ジルはそんな彼らに狂気のようなものを感じ、無意識に足を引いた。

その行動を彼らの言い分に対しての肯定ととつたのだろう。怒声

と罵倒の声は、さらに早くなる。

すると、そこまでただ静かに傍観していたトアがアンフェールに何かを言った。それに躊躇うことなく頷いた青年に、トアはゆっくりとその左手を上げて、酷く堂々と、引き金を引いた。

静まり返る村人達に構うことなく、トアはジルの手を引いて歩き出す。アンフェールもそれに続いたが不意に足を止め振り返りもせず一言。

『余所者』の俺を長い間、この村にいさせてくれて…本当にありがとうございました」

感情のこもらない言葉は、村人達に何を与えたのか…彼らは至高の才を持った青年を引き止めることなく見送った。

そんな事があつてから約4日。新しくアンフェールを迎え、トアとジルは旅を再開した。

見晴らしのいい緑の丘を3人はとても楽しげに歩く…わけではなく。なんとも形容しがたい微妙な空気感の中、道を進む。

「…で、ほんとに帝都に行くわけ？」

「帝都の方が情報も多いでしょうし、ここら一番近い場所ですからね」ふと、今日何度目かわからない間にアンフェールのハッキリとした肯定の言葉を返す。トアは肩を落とした。

それを見たジルは心配そうに眉根を寄せ、さり気なく歩く速度を落とす。それに気づいたアンフェールはジルに歩幅を合わせた。

「…帝都に行くって方針が決まってるから、何だかトア、元気ない…よね？」

「そうですね…」

そうして付かず離れずの距離をトアととると、ジルが口を開く。アンフェールは言葉では素っ気ないような態度だが、その瞳が少年を心配していることを雄弁に語っている。

しかしどれだけ心配しようとも、トアは何も語らないだろう。実際にそれとなく聞いてみたがそれすらも見透かされたような瞳で「何でもない」と言われただけだから。

「トアは、何も言ってくれないから…」

「そのようですね。口数が少ないわけではないのに、大事なところは必ずはぐらかす」

「うん…それに、」

「?、どうしたんですか」

「ううん…：きつと、私の気のせいだから」

不意に飲み込まれた言葉と酷く悲しげな瞳。

ジルのから視線を外したアンフェールは、自分たちの会話に気づいているであろう紅色の少年を見て「そうですか」と小さくこぼした。

後ろの2人の会話が否応なしに聞こえてくる。トアは悟られないようにため息をはいた。

別にこれからの方針に不満がある訳では無い。情報が欲しいのならば、人が集まる場所に行くのは当然なことだからだ。

2人の判断は、正しい。正しいのだけれども…それでもあの場所には行きたくなかった。

ふと、風になびかれる美しい青が見えた。幻だとわかっているにもかかわらず。無意識に瞳を閉じて冷静になろうとした。

その時。

「トアッ!!止まって!!」

焦りを多く含んだ鋭い声にハッと我に返るよりも早く、体が後ろに飛びのこうとした時。ガシツと何かを足がつつちりと掴んだ。

反射的に掴まれていない方の足で『それ』を蹴り飛ばそうとしたトアは、

「…あ、」

瞬き一つの間の後に、まるで石のようにかたまり動かなくなった。

「トアっ!?何してるんですか!早くこっちに来てくださいッ」

しかし、アンフェールの怒りを含んだ声でさえもトアを動かすことは出来ない。不審に思ったジルがそっとトアに近づく。

そして、小さな、そしてどこか喜びを含んだ声を聞いた。

「…ニ」?

トアの足を掴んでいた『それ』…いや、女の子が弾かれたように顔を上げて瞳を輝かせながら言った。

「お久しぶりでございます、トア様っ!!」

呼吸3個分の間の後、ジルとアンフェールの絶叫が響いた。

コツコツと、軽快な靴音を鳴らしながらその人影は大きな窓に近づきそして外を見た。

一つ瞬きをして、顔つきを険しくし、その人は告げた。

「…必ず、見つけ出す」

「私の…蒼い君」

小さな疑惑はしかし泡のように消えて

絶叫からなんとか持ち直したアンフェールとジルは改めて新しく現れた存在をじっくりと観察した。

そんなあまり良くない視線にニコニコと、明るく笑って応じるのはオレンジ色の髪を持った女の子だ。

数分前、大胆にもトアの足を掴んで彼の気を引き付けたその女の子はトアの「とりあえず立て」という言葉に素直に従って立ち上がった。もちろん、トアの足は離れた。

一息ついたトアはふと女の子の着たよくわからない服に土がついていることに気がついた。未だ不審そうに女の子に視線を送っている2人を他所に、トアは迷わず手を伸ばしその土を払ってやる。

「わわっ!!すみません、トア様!」

「格好については『あいつ』口うるさいだろ?」

その様子をみて、アンフェールは目を見開く。口調は荒いしめんどくさがりな彼は、案外面倒見がいいらしい。トアの隠された一面を見た気がしたアンフェールである。

「…ところで、その子は…」

と、黙って二人の様子を見ていたジルが声をかける。先程までの不審そうに向けられていた視線が無くなっているのを見ると、トアがかなり親しそうにしているからなのだろう。

「ああ、こいつは『ニコ』俺の知り合いの…あーっと、メイド??」

「はい!私は我がお師匠さまに作り出されたにん」

「はーいつ、ストップッ!!!」

そのジルの素朴な疑問にトアが一瞬迷いながら答える。それに肯定するように引き継がれた少女:ニコの言葉は、しかしトア自身によって遮られた。

「トア?どうしたんです、そんなに焦って」

その行動の不審さにアンフェールは素直に疑問を投げかける。トアは瞳を細めると、ニコに何やら耳打ちした。アンフェールは「トア」と再び声をかけると、代わりにニコが応えた。

「ニコはお師匠さまとトア様のお願いならなんでも聞きます！なので、先ほどのニコの言葉は撤回します！」

「そうそう、それでいいんだぞー」

その名の通り、ニコニコと笑いながら元気よく応え女の子の頭をトアが優しい手つきで撫でる。

一見、かなり微笑ましい光景だが、肝心のことは決して口を割らない姿勢を貫き通すトアにジルが口を尖らせ、アンフェールは困ったように苦笑う。

因みに、ジルとアンフェールがトアに煙に巻かれても文句は言わないようにしている。これまでも、何かと晶破現象に詳しい素振りを見せるトアに質問をぶつけてきたが、決して彼はその口を割ることはなく、スルリと会話をすり替えてしまうのだ。

「で…ニコ、お前何しに来たんだ」

フツと息を吐いて一瞬の間を作った後、トアはその瞳を細めながらニコに聞く。ジルはその間に同意するようにこくと頷いた。

すると、ニコは今までの笑顔が嘘のように瞬き一つの間でその顔から感情を消した。

「…お師匠様からトア様へ、伝言を預かってきたのです」

別人のような声音で話すニコに、アンフェールが反射的にトアを引き寄せてそのまま背で庇う。

珍しくポカンとした顔をしたトアは、しかし警戒した様子でニコを睨みつけるアンフェールに何も言わなかった。

『まどろみからは覚めたのか？』…だそうでございます」

「…微睡み…？」

ボソリとジルがつぶやく。何のことだろうかとニコから視線を外し、トアに視線を向ける。

未だアンフェールの後ろに立つ彼。その表情を見ようとすればぐつと俯き、長い髪でその顔を隠しているために一つもそれを探ることは出来ない。

結局、しばらくしてトアが呟いた「そうか」という短い言葉で、緊張感に満ちたその空間は消え失せたのだった。

自分から離れていく彼を見送りながら、アンフェールはトアの本当に小さな声を心の中で繰り返す。

(リナディノア)

この言葉にはなにか意味があるのだろうか。今の彼にはわからない。

アンフェールはこの言葉の意味をトアに聞かなかった。『この時』は大きな問題でもない判断したからだ。

だが、本当にずっと後。彼はどうしてこの時一言でもあの言葉の意味をトアに聞かなかったかと、顔を覆って後悔するのだ。

「あと少し」

カツンと、音が鳴る。

「あと少しで…会える」

その人は口元に笑を作った。

それは、そう。後悔。

突然の不思議な少女の訪問からはや3日。トア達は目的地としていた帝都に到着した。すぐに宿屋へ向かい休んだ方がいとアンフェールに提案された一行は、その言葉にうなづくはずだった。

が、ただ1人。それに異を唱える者がいた。

「あー…悪いがちよい止まっててくれないか？」

珍しく申し訳無さそうな顔をしながらトアが言う。こてんと首を傾げながらジルは「どうしたの？」と素直に疑問を発する。

「そんなに時間はかかんねーよ」

そう言いながら、旅の荷物が入っている道具袋を漁る。小さく軽いのには有り得ないほどアイテムが入るがこれは決してツツコンではないと誰もが思っている。そうこうしている間に、ふと見上げればトアは白いロングコートにつけられているフードを目深にかぶる。そのせいで彼の綺麗な顔は見えなくなってしまった。

「トア？なぜ顔を…」

アンフェールの言葉にトアは困ったように微笑んだのだろう。気配でそれか伝わる。しばらくトアのことを見つめていたが口を開こうとするうごきはしない。この様子では何も語ってはくれないだろう。諦めたことをしめようにため息を吐いた。

「わあ…すごい」

そうして尚も嫌がる素振りを見せるトアを半ば引きずるようにしながらなんとか帝都に入る。そうすれば広がる色鮮やかな物。建物。

人。人。人：飲み込まれそうなほど溢れるそれらは、楽しげにその表情に花を咲かせる。

「いつ来ても騒がしいですね、ここは」

眩しそうに瞳を細めながらアンフェールは言った。ジルはその言葉に何度もうなづく。キラキラと光り輝くように彼女の瞳に映るその光景は、すぐに彼女の意識をすべて奪い取る。

だから彼女は気づかない。その光景をどこまでも冷たく見つめる

少年の視線に。どちらにせよ、フードを深くかぶって瞳を隠している
ので誰かが気づくことは無かったかもしれないが。

「なんなら散策してみますか？どっち道、晶破現象について聞き込み
しなければならぬですから」

「あ…そうだったね…旅の目的を失いそうになってたわ」

言葉を発することなどせず、ただ黙って視線を下げるトアに未だ気
づかずにジルとアンフェールは楽しげにこれからの行動を決めてい
く。その楽しげな声に誘われるようにふっとトアは顔を上げてジル
たちを見た。

フードの中の表情は今までになく苦しげで。しかし、花が咲くよう
にジルが微笑みをもらすと、その表情がほんの少しだけ柔らかいもの
となった。

「トア…これから少し散策したいのだけれど…」

それで構わないかな？と続かれるはずだった言葉は、しかし突如響
いた甲高い悲鳴に飲み込まれる。

「何事でしょうか？」

呑気に言葉を発するニコに答えることはせず、トアは迷うことなく
その身を翻して走り出した。アンフェールとジルは一瞬遅れてそれ
に続く。それを、やはり呑気に見送りながらニコは3人とは対照的に
ゆったりと困惑した表情をしているように「みせている」であろう帝
都に住む人々の中を歩き出した。

「…何度来ても、胸が張り裂けそうになるくらいに気持ち悪いところ
ですね〜ほーんと…嫌になりますわ」

突然走り出したトアを追いかけて走りついたのは、常ならば人々が
楽しげに言葉を交わしている公園にも似た広場。なかなか開けた
場所だ。

しかし、そこは常にならない緊迫した空気に飲まれている。視線を向け
ればそこにいたのは仰々しい黒い鎧に似た服を身につけた女性と彼
女のものであるらしい剣を向けられて怯えきった表情でその場にう
ずくまる青年だ。

「自分がしたこと…わかってるな？」

厳かに告げられた言葉に青年はビクリと体を震わせながら壊れたオルゴールのように「お許しを…」慈悲を…と何度も呟いている。

状態がうまく飲み込めずにいるジルとアンフェールはやつとの思いでトアに追いつき、まるで立ちすくむようにそれを見つめる少年に声をかける。

「もう…急にどうしたの？」

「…」

しかしそれに応えることもせず、トアはゆっくりと息を吐く。そして、人形のように動かなかったその体を動かし口元に指を持っていきそつと緩やかに唇を動かした。

「…え？」

その緩やかな動きに似合わないどこまでも優しい言葉に、次はジルが人形のように動けなくなった。それはアンフェールも同じよう出人形のようにとまではいかないが、動きを封じられる。

それを見届けてトアはクルリと彼らに背を向けて歩き出す。コツコツとわざと大きく足音を立てながらその2人に近づいていく。

トアは、時々不思議な程にその場の全ての空気を簡単に支配してしまう。それは今回も例外ではないらしい。普通ならばかき消されてしまうだろうその足音だけで、彼はその場にいた全員の視線を奪った。

まるで犯してはならない領域に踏み込んだような錯覚をもたらすそのなんとも言えない空気を破ったのは、黒い鎧の女性だった。彼女は手にしていたその立派な剣を派手な音を立てて落としたのだ。

そうして瞬きも忘れたその瞳は真っ直ぐにトアを射抜き。震える唇がなんとか音を紡ぐ。

「ソラル…トリア？」

それは彼の長い本名だ。彼自身が馬鹿みたいに長いからトアでいいと言っていた、本名。それを彼女はまるで歓喜に震えるような声で呼ぶのだ。

喉が絡まったように声が出ない。そう思いながらも口の動きだけでジルはトアを呼んだ。しかし、それが彼に聞こえるわけがない。代わりにトアはその黒い鎧を身にまとった女性に答えた。

「久しぶりだな…ディゼル」

ジルは心臓がドクンと大きく弾んだのを感じた。

その時。

喉が潰れようとも、彼に声をかけていれば。

その時間。

人形のように動かなくなったその足を動かさせていれば。

その瞬間。

なんでもいいから彼の心を私に向けることさえできれば。

「私」はこんなに泣かなくても良かったのかな。

でももうわかってるよ。遅すぎたんだね。

もう遅いと何度も嘆くのは本当に本当にあとの事だけれど。